



# スク水メイドが ご奉仕します!

小説 神楽陽子  
挿絵 黒澤清崇

立ち読み版

第一話

ボクのメイドは上級生×2

006

第二話

ひとりでできないもん！

061

第三話

スクール水着のぬるぬるソープ

108

第四話

お仕置きは肛門開発？

142

第五話

メイドに溺れるご主人様

207

## 登場人物紹介

Characters



### きりゅう すい 桐生 翠

一成の一年上上のK中央学院の二年生で、生徒会副会長。明るくサッパリとした性格で友達も多いが、割とウツカリしている一面も。実は一成付きのメイドでもあり、屋敷では彼の世話をする。一成のことが好きだが、なかなか素直になれない。



びやくじょう くれあ

### 白城 紅亞

翠とは同級生で、圧倒的な人気で生徒会長にもなったおしとやかな少女。かつては上流階級のお嬢様で一成とは許婚だったが両親が事業で失敗したため、彼の屋敷でメイドとして仕えることになった。

りく かずなり

### 陸 一成

大変裕福な資産家のひとり息子。忙しい両親とは別居状態のため、広い屋敷にメイドたちと住む。内気で消極的な性格で、生徒会では会計を務めている。

蒸し暑くなりつつある季節には欠かせない水分が、舌の上に運ばれてきた。肉類や魚の後味は、柑橘系の酸味の中で薄れていく。

紅亞も一成に正面向いて、ご主人様の震えがちな唇へとスプーンを差し込んだ。

「美味しいですか？ ご主人さま」

「お、美味しいよ。すぐく」

美女と評判の女の子ふたりに食べさせてもらっているのだから、何であれ、美味しいに決まっている。男に生まれて最高に贅沢な一時だ。

夏休みになったらこういう機会を増やすのも楽しいに違いない。水着姿のメイドたちとプールで遊び、休憩がてらデザートを食べさせてもらいたい。

（これって、もっと暑くなつてからだだと楽しいかも？）

そのためにも、まずは水泳の特訓だろうか。

だが、夏本番の来月にはメイドがいなくなっていることに、はっとする。

「そ、そういえば！ スイ姉と紅亞って」

「きゃっ、ご主人さま？」

一成が不意に動いたために、紅亞が手を滑らせてしまった。半切りのグレープフルーツがひっくり返って巨乳に乗っかり、果汁をスクール水着に染み込ませていく。

「ごめん！ ボクがいきなり動いたり……その、したから」

正面から女性の胸を目撃してしまった男の子は真っ赤になり、急いで顔を背けた。恥ずかしがり屋のメイドも頬を染め、隙だらけの肉体を振じらせる。

「いえ、どうか、お気になさらなくてください。その……フルーツが冷たくて、びっくりしてしまっただけですから……」

間もなくグレープフルーツは女体曲線を滑り落ちた。

もうひとりのメイドが愉快そうにやにやして、少年の耳に囁く。

「食べてあげたら？ 紅亞さんのフルーツ」

「すっ、スイ姉？ 変なこと言わないでっば！」

会話が丸聞こえに違いはない紅亞が紅潮し、豊乳の両脇を撫であげながら困惑する。

「わたくしを……ご所望なのですか？」

生真面目なメイドは翠の提案を真に受けて、おずおずと、たわわな肉感の巨乳に柑橘類のエキスを塗りにたくった。水着姿になってからの彼女は想定外に大胆だ。ご主人様専用のサマーベッドへと乗りあがり、ジューシーな膨らみを弾ませる。

「ご主人さま、あの、よろしければ是非……ご賞味を」

果汁はじわじわとスクール水着に浸透し、濃紺色の潤沢をぬめらせた。液まみれの巨乳が濃厚な色香を漂わせ、健康な男の子の視界と頭をくらくらさせる。液まみれの巨乳が濃厚な色香を漂わせ、健康な男の子の視界と頭をくらくらさせる。

唐突なアプローチに期待が半分、躊躇も半分。

「ち……ちよつと待ってよ？ 紅亞、ボクはそんなこと……」

紅亞が従順すぎるために、ブレイキはこちらで利かせるしかない。しかし距離を取ろうとすると、もうひとりのメイドとぶつかってしまう。

「オトコを見せなさいよ、ナル坊、情けないわね。紅亞さんは一生懸命なのに」

我が物顔でサマーベッドに寝転ぶ翠は、年下の少年を馬鹿にする調子だった。じとっと軽蔑めいた視線で、男としての不甲斐なさをなじってくる。

乗せられているとわかっていても悔しい。

「でっ、できないわけじゃないよ。ただ、ボクはその、こーいうのは」

「怖いんでしょ？ ナル坊って自分からは押しつけていけないタイプだもんね」

しかし実際に怖くもあつて、凶星だ。メイドたちと性的な一線を越えたい一方、現状に甘んじてもいたい、優柔不断な気持ちを振りきれない。

紅亜はもどかしそうに腰を捻り、豊大な曲線をさすって待つだけ。涙交じりの上目使いで、ご主人様に愛されるのを切に望む。

「わたくしではやつぱり……嫌、ですか？」

これまでにも、それとなく夜間に一成の部屋を訪れるなど、彼女が伽を意識する素振りはあつた。しかし今日ほどストレートに誘惑されたのは初めてだ。

「嫌なんてことは全然！ そうじゃなくて、あの、なんでいきなり……」

メイドの繊細な手が肉感的なボディラインを、見せびらかすように撫でおろす。

「カラダの線がこんなに出てると、わたくし、なんだか熱くなつてしまいました……それに桐生さまが、紺色は、殿方の……性欲を三倍にする、と」

そんな理屈は聞いたことがなかった。翠の確信犯的な笑みからしても、彼女が紅亜に嘘を吹き込んだに違いない。

「桐生さまにいただいた本で、メイドの仕事をたくさん勉強したんです。ご主人さまに気

持ちよくなつてもらうことがメイドの務めですから」

色仕掛けに戸惑う少年は、翠にだけ聞こえるぎりぎりの小声で尋ねた。

「紅亞に何読ませたの？ スイ姉」

「ボクのメイドは同級生、っていうエッチなやつ。読んでたらヘンな気分になってくるから、紅亞さんにあげちゃったんだけど……」

どうやら深窓の令嬢は低俗な本に感化されてしまったらしい。

ご主人様の耳元で、翠が男の子を甘やかすみたいに囁く。

「それよりい、どうするの？ 紅亞さんの特大オツパイフルーツ。ご主人サマが食べないんなら、あたしが食べちゃおうかしら」

「お……おっぱいふるーっ？」

「あのオツパイにがぶって噛みついて、ちゅうって吸うの」

聞いているだけで生唾が溜まった。ごくりと喉が鳴るたび、性的な衝動が大きくなって理性を揺さぶる。

（紅亞のオツパイに、ボクが……がぶって）

紅亞本人の手に余る特大のサイズに、かじりついてみたくなる。

「ご主人さま、どうぞ……お召し上がりになってください。今夜のデザートです」  
ご主人様はふらふらと誘われ、メイド謹製のデザートに近づいた。

「わ……わかったよ、紅亞。えっと、いただきます……」

少々息遣いを荒くして、メイドの一寸な瞳に頷いてから、エプロンに隠れた無地のスク

ール水着に手を這わせていく。

(わわっ、柔らかくて、あったかいぞ?)

まずは遠慮がちに柳腰をさすり、壊れ物を扱うような手の運びで、華奢な身体を慎重に抱き締めてやる。

「遠慮などなさらず、ご主人さまの……あっ！ お、お好きなように」

しとやかなメイドは愛撫に色っぽく悶え、抱かれる腰をくねらせた。右手の人差し指を甘く噛んでは、喘ぎを刻む。

スクール水着は上に行くほど果汁でねとねとしていた。てのひらに飛び込んできた曲線もべたつく。少年の手は、まず指で果肉の輪郭をなぞり、それから麓を押し掴んだ。

「ご主人さま、はあっ、そ、そこは敏感、ですから……あはあ！」

紅亜の唇が途端に緩んで、湿った吐息を吐き出す。潤んだ目つきが悩ましい。

濡れそぼったスクール水着に包まれた豊乳はとにかく柔らかかった。特大のマシユマロが重さと弾力を得たような、不思議な感触だ。身体の一部とは思えない。

非力な少年でも、揉むと、全体がむにゅとひしゃげ、指の間にも柔感を割り込ませてくる。おまけに、比較的乾いてはいても同じ類の感触が、背後からも襲ってくる。

「ご主人さまってば、本領発揮？ 触り方やっらしー」

翠が背中に抱きつき、ふくよかな膨らみを押し付けてきたのだ。もたれるには適度に心地よく、緊張のため強張っていた両肩から力がかくんと抜けてしまう。

「ち、ちよつと……スイ姉？ 当たってる」

「触ってくるくせに今更？ 真っ赤になっちゃって」

初心な少年は決まりの悪い赤面を隠すように、いよいよ紅亜の、実り豊かな双乳に顔を埋めた。舌を出し、スクール水着と柔肌の境界線から舐めていく。

すると紅亜が春声のトーンをあげ、腰で暴れようとする。それでも彼女は一切の抵抗をせず、ご主人様の口付けに耐えていた。

「ひああん！ ごっ、ご主人さま……あふっ、わたくしの、いかがですか？」

舌で舐めるくらいのもりだったのが、口を大きく開いてしまう。火照った柔乳にかぶりついて、スクール水着に染みた甘酸っぱい果汁をすすする。

(……おいしい！)

これは極上のオッパイフルーツだ。果汁ばかりではなく、スクール水着に蓄えられた牝の汗や温もりにもそそられ、啄むほど口が酸っぱくなった。

「おいひ……ふはっ、おいしいよ、くれあっ」

いかがわしい遊びをしている自覚は強烈なものの、止められない。ここまで欲求に正直になれることに一成本人も驚いている。

グレイプフルーツの酸味を吸い上げるついでに、スクール水着の縁を噛み、巨乳を牽引してもみる。色悶えるメイドは清楚な美唇を綻ばせ、可愛く鳴いた。

「残さずに、んふあ、ご、ご賞味くださいね？ ご主人さまあ」

ひとつ年上であるにもかかわらず、ご主人様に甘えたがって、たおやかな腕を絡ませてくる。首をのたうたせ、優美なストレートヘアを波打たせる。

オッパイに夢中になつてゐる少年の服を、翠がするすると脱がし始めた。

「ご主人サマのカラダ、熱くなつてきてるわよお」

メイドを触りながらメイドに触られもする、挟み撃ち。翠の舐めるような手つきが、男の子の頼りない胸板を撫でまわす。脱がされたのに身体は熱く、汗の気が消えない。

屋外なのに、空気は吐息みたいに湿つており、熱気も立ち込める。

「まだまだたくさん、あふつ、ありますから……が、がぶつて、してください」

紅亞の手がエプロンの肩紐をずらして、スクール水着に肉釣り鐘のラインをくつきりと浮かべた。肩幅も超えそうなサイズがたふんと弾む。

薄生地には二箇所、尖つた角ができていた。そこが乳頭であることに、いつその興奮と欲求を触発され、無遠慮に頬張つてしまう。

「んうぐ！ たべひれないよ、くれあのオッパイ、おつきふて」

メイドの優しさに屈して、赤子みたいに、がむしゃらに乳を吸う。ぬめるスクール水着が少年の舌遣いと摩擦を生み、乳芽のしこつた輪郭がだんだん鮮明になつてくる。

「あくふつ、わたくし、おとおッパイ、ひああん、食べられてますの！」

紅亞は恥ずかしそうに顔を赤らめ、満足そうにも微笑んでいた。ご主人様が乳の突起を啄むたび、瞳を細め、押しさがつた両肩を力弱く震わせる。

甘いムードが立ち込め、頭の中にも高揚感が蔓延した。

「ご主人サマつたら可愛いじゃない。……あたしのも食べさせて、欲、し、い？」

さらに後ろから魅力的な囁きを吹き込まれる。

「欲しい！ す、スイ姉のもの！」

欲張りな少年は紅亞の果実と涎の糸を引きながら、振り向き、珍しく即答した。翠は多少たじろいだものの、年下の男の子を弄ぶのが楽しいのか、すぐに調子を取り戻す。

「欲張りなんだから。仕方ないわね、お姉さんも可愛がつてあげる」

年上のお姉さんは照れつつ、紅亞と競えるサイズの巨乳に、グレープフルーツの果汁を大量に滴らせた。スクール水着が湿って吸いつき、柔乳を酸っぱくにおわせる。

さらに彼女の手がエプロンの肩紐を緩め、美味しそうな果実を二個とも持ち上げる。

「ほおら、ご主人サマ。召、し、あ、が、れ？」

「う、うん。いただきます……んむう」

溜まった生唾を呑みくだすこともせず、ご主人様は口を開け、翠の濡れたスクール水着にしゃぶりついた。同時に紅亞の細腰を抱き寄せ、身体同士を密着させておく。

どちらのメイドとも離れたくない。

「ひあ？ あ……ああつ、い、いきなり……そんな、しゃぶっちゃ」

男の子の貪欲な乳吸いに翠も息を乱し始めた。優位にありたいらしく、少年の頭を撫でながら、女の余裕をアピールするものの。

「んくつはあ、ご主人サマ？ あん、がつつかなくても」

青柳の眉を八の字に傾け、頬の上気は隠せていない。牝の肉体を蒸らし、夜風を少しも寄せずに火照っていく。

スクール水着のストラップを引つ掛けた肩は、右と左が不規則に上下した。

(スイ姉……感じてるのかな?)

柔らかな乳肉の麓を搾りつつ、先端がありそうな位置に舌を這わせる。紅亞の時は闇雲になってしまったが、今回は揉むごとに、相手の快感を意識する。

シンプルなスクール水着でも際どくなってしまう熟れた肉体が、敏感そうに腰を打ち震わせた。男の子の頭を撫でていた手がうなじへと、すがりつくように降りてくる。

構わず少年は巨乳のあちこちを啄み、偶然、急所をちゅうつと吸い上げた。

「ひはああっ? あく……ち、違うのよ、はあ、今のは……」

強がる表情とは裏腹に、肉体はご主人様に忠実かつ正直だ。薄生地に乳の突起をびんと立たせ、正確な場所を教えてくれる。おまけに後ろから紅亞が指をさす。

「ご主人さま、ここですよ。すぐくよくなっちゃうんです」

「紅亞さん? あ、あたしは別に……んあいい!」

大きく息を吸い込んで、ご主人様は生意気なメイドの先端を深めに頬張った。唇で揉むようにはぐはぐと、スクール水着ごと食べてしまう。ねぶつて味わう。

「ちよつとナル坊、やめ! んあつ、お、怒るわよ?」

強情な台詞でも声に張りが無い。あからさまに上擦り、色っぽい吐息を織り交ぜる。勝気な彼女はきつと「自分は耐えられる」と思っていたのだろう。

(すごいよ! あのスイ姉が、オッパイ吸われるだけで!)

昔馴染みの苦手な女の子を初めて負かした気分で、乳責めをやめられなかった。吸えば吸うほど感じてくれる素直な肉体と、それを認めたがらない意固地な表情がそる。

「おかわりはいかがですか？ んはあ、わたくしのオツパイも美味しいですよ」

もうひとりのメイドも巨乳の潤いを新しくして、翠と一成のスキンシップに割り込んでくる。ひたすら従順なメイドも可愛かった。

ふたりとも腰がやや引けてはいるものの、豊乳のサイズは必然的に前に飛び出す。

ご主人様に懐っこいオツパイたちが薄生地のををぴくんと疼かせた。

「おかわりもつ、もぐ、もろうよ。んぐ」

押し揉むと、スクール水着に蓄えられた果汁が滲み、口当たりはジューシーだ。紅亜は少年の舌技に屈服して、翠は反抗しつつ、心地よさそうに肩を降ろしていく。

「あんっ！ ご主人さま、も……もっとしゃぶって、あはあ！」

「そこ吸っちゃだめ！ やっ、びりびりって、ンあふう！」

ご主人様は特大のオツパイフルツを四つも独占し、薄生地ごと吸っては、乳芽の輪郭を舌でなぞった。自分でも信じられないくらい悪戯に積極的になれる。

両手でメイドふたりのそれぞれの肩紐のフリルをくぐり、乳果実の麓を丹念に揉みしだく。紅亜はもうすつかり瞳を蕩かせ、緩みきった唇をわななかせていた。

「んはあ……こ、これが伽、なのですね……ひやああ」

煌びやかなストレートヘアの波に腰でもつれ、恥じらいに満ちた表情に艶を深める。握力の弱い手でエプロンをきゅつと掴む。

翠も片目を伏せ、ポニーテールを巻きつけるように身体を振った。

「こら、ナル坊……はあ、いつ、いい加減に！」

しかしいつまでも受け入れてはくれず、男の子の手を痛く抓つかってしまふ。

「あいたつ？　いてて……スイ姉？」

脇目も振らず乳遊びなどに耽たっていた煩惱少年は、ようやく我に返り、赤くなった手をさすった。翠の猫目に睨にらまれると条件反射で、四肢の筋が萎縮する。

メイドたちは呼吸を落ち着かせつつ、大人びていても初々しく頬を赤らめた。

「少しは遠慮しなさいよ？　野良犬かなんかみたいに、み、みともないんだから」

「はあ、そんなことはありませんよ、ご主人さま。みともないのは、わたくしたちのほうで……恥ずかしい声をお聞かせしてしまつて」

「あたしまで数えないでつてば！　紅亞さんだけでしょ？」

どちらの声が出るくらいに感じていたらしい。翠がいくら否定しても、同じ種類の快楽に震えていた紅亞が明言するのだから、間違いない。

（スイ姉も紅亞も……感じさせちゃつたんだ）

べとつく口元を拭いてもせず、一成はひとつの達成感に感動していた。学院でも評判の巨乳を一遍に平らげてしまった優越感もある。

おかげで、男の子の率直な部分はすっかり硬くなっている。

「きゃ……や、やですわ、ご主人さま」

紅亞が咄嗟に両手で顔を覆った。細い指の隙間で両方の瞳を驚かせる。

ご主人様の股間は堂々と TENT を張っていた。ズボンも破りそうなくらいの急角度で鋭く勃起しており、下着との衣擦れが少々痛い。



「くふっ、これくらい、はあ、あたしはなんとも……」

調子付いた少年だけが相手なら、すぐにでも足蹴にできるのだろう。だが紅亜の抱擁を力づくでは振り解けなくて、されるがままになっている。

「ご主人さま、そろそろ桐生さまにも」

「う、うん。そ……そうだよね」

よく暴れる脚の片方を、足首の位置で掴んで持ち上げてやれば、翠はもう満足に身動きできない。それから少年は、疼いてならない肉棒で二杯目の処女を狙った。

剛直は身体の一部が焼け鉄になったかのような硬さと高熱だ。くらつとめまいがして、行為の善し悪しどころではない。

（スイ姉とはやく、はやくはやく！）

他のことはどうだっていい。ただ翠の中を知りたい、感じたいという挿入への意欲が高まり、脳を強迫する。

「やっやだ！ あたし、そ、その……心の準備まだ」

「いくよ？ スイ姉、はふうっ、くうううう！」

メイドの言い分に聞く耳持たず、ご主人様はどうとう処女穴に極太を挿し込んだ。直進が難しい狭さが抵抗となるものの、ほぐすように捻りを加える。

ずぶ……ずぶっ、ずぶずぶずぶ！

「ひぎいいい、ひっ、ひろがる、んあああああつ、オマ○こわれちゃううう！」

ご主人様に牝穴を愛され始めた贅沢なメイドが、しゃくりあげ、痛切に叫ぶ。ずぶ濡れ

のスクール水着をまとった肉体は熱化し、薄生地越しにもわかるくらい粘った汗を大量に湧きあがらせた。

「もうすぐ、す、スイ姉の中にちゃんと!」

赤腫れた亀頭がどうか肉唇の輪をくぐったら、スクール水着と片足の足首を掴む力を強くして、窮屈な膣口へとサオも飛び込ませる。

煮えたヌルヌル感が滑り落ち、雁首の括れを締め付けた。ぬめった粘膜に熱く包み込まれる心地よさは、オマ○コならでは。病み付きになりそうだ。

「スイ姉のなかに、はっ、はいってく!」

「ほんとにおつきいから、ナル坊、無理……ひやああ!」

無理なはずはない、一成のサイズで可能なことは実証済みである。先ほどのセックスでは手伝ってもらわなければ進めなかったところを、今回こそ自分の力で突き進む。

ずぶぶっ、ぶち! ぶちぶち!

引きちぎるような感觸の直後、先端に熱い液が染みた。

「あいいいいいッ!? あう、あ、あたし……んはあ、あつあああ!」

翠の四肢が一斉に痙攣し、背をのけぞらせる。少年にとつて二回目となる処女穴は、肉棒にすぎるように狭苦しく窄まり、締め付けを格段によくした。

紅亞の時は申し訳なさや遠慮が先行しがちだったが、今回は違う。パーズンを奪えた嗜虐的な興奮で、勃起を硬くし、膣の温もりを全長で味わう。

(ボク、スイ姉と……!)

昔馴染みの勝気なお姉さんと、こうしてセックスしているのが信じられなかった。自分のオチンチンが翠の中で雁首を伸ばし、脈打っているのだ。あるいはオマ○コのほうが脈打って、ひくひくしているのかも。

「入っちゃったよ？ スイ姉の、はあ、ヌルヌルしてて気持ちいい！」

紅亜の穴はもつと汁気の多かった感がある。翠の穴は、新鮮な白身魚のようにぷりぷりとしており、ヒダヒダの感触が鮮明だ。

単純にペニスへの刺激だけではない、淫猥な心地よさに酔いしれ、爪先から脳天までが痺れてしまう。少年はスクール水着のサイドにも掴まり、深まる挿入に悶えた。

「な、ナル坊……抜いて！ くはあ、こつ、こんなの、ヘンになっちゃうからあ！」

処女穴を押し掘げられたメイドも軽い発作に陥って、肩を上下させ、ポニーテールを波打たせる。持ち前の強気はなりを潜め、犯されているのに感じるしかない、愛らしいマゾっ気だ。肉体の動きに波があり、苦悶の身振りもいやらしい。

溢れる発情汁が肉茎を伝わり、玉袋まで濡らす。

「桐生さまの中で、んあ、熱くなつていらつしやるんですね。ここに溜まつてらつしやる赤ちゃん、とても出たがってます」

べたべたのそれを、紅亜の手が揉みほぐしていた。お手玉を取るかのような手つきで、劣情に拍車を掛けてくる。

「はあつ、こ、これからだよ？ スイ姉、んはあ！」

貪りたい衝動に駆られ、ご主人様はスクール水着と、メイドの片足を握る力を強くした。

そして腰を稚拙に返し、肉棒をゆつくりとスライドさせる。

進行方向に逆らうエラが摩擦を生み、肉襞をうごうぞと絡み付かせた。

「らつらめ! そんな、ぶ、ぶつといのうごかしちゃ、ひくうう!」

翠のソプラノボイスが、痛みをとくに越えた快楽を誘惑的に響かせる。可憐なフリルをまとった肉体を過熱させ、スクール水着にねつとりと恥汗を染み渡らせる。

幼い作りだった秘裂も、拡張によつて見事な花を咲かせた。幹胴に肉唇を引きずらせる有様からして、好き好んでオチンチンをしゃぶるかのようだ。

「めくれるっ! めくれちゃうから、んくあぁナル坊! あ、あたし、らめつていつてるじゃない、えぐつ、バカあ!」

「スイ姉もっ感じて、よさそうだよ? すつ、すごく!」

珍しく弱気な反応にそそれられ、もつと、もつと喘がせてみたくなる。

中は苛烈に締めりがよく、ミリサイズの舌を何十枚も重ねたような、肉襞の感触が執拗にまとわりついてきた。間違いない怒張の形を知られていて、恥ずかしい。

しかし、それくらいで止めようなどと思わない。

「ずちゅっ! ぐちゃ、ぬちゅ! ぐちゃっ、ぬちゅ!」

雁首の赤みが見えかかったところで、肉太を押し戻し、粘膜襞のうねりを泳ぐ。悦痺れが摩擦の味わいを甘くする。

それでもやや腰が引けている少年のお尻を、紅亞が優しくさすってくれた。

「ご立派です……ご主人さまが、はぁ、セックスなさるお姿。桐生さまより強くって、あ

あん、オマ○コに、とつても情熱的で」

翠の巨乳に押し潰された姿勢であつても、ご主人様の肌と触れていたがる純情さがいいらしい。彼女こそメイドの鑑だ。

「ひあぐっ！ こっ、こんなの、だめえ！ すごい痺れて……いひはあッ！ ナル坊のがおくっ、おくにひて、へあ、しびれひやうの！」

逆にメイドとしての分をわきまえていない翠には、極太で徹底的にお仕置きである。仕置きのつもりがなくとも、勃起のサイズのせいで乱暴にならざるをえない。

次第に少年は抜き挿しに慣れてきた。腰でペニスを動かすという、セックスでしか出番のない運動に汗かいて、激しく息を乱す。

「はあっ、はあ！ スイ姉、いいよっ！ スイ姉のオマ○コ！」

喘ぐ声は男らしくないし、身体つきも頼りない。しかし股間だけは飢えた狼みたいに野性的で、大好物になりつつあるオマ○コを食っていた。獲物が逃げの体勢に入つても、片足を引つ掴んで逃がさない。

その男らしさを紅亞はすでに認めてくれている。

「ほんとうに素敵で……あん、わ、わたくし、また疼いちゃつてるみたいです」  
「はげし……！ ナル坊、紅亞さんの時は、んあっ、と、止まつたのに！」

翠にも少しはわかつてもらえたかもしれない。これこそ、ご主人様のセックスだ。

スクール水着越しにお尻の丸みを堪能しつつ、自分の身体で一番硬くなった部分を、体重も掛けて押し込む。

ずちゅずちゅつ！ ぐぼつ、ずちやぬちや！

秘壺の奥には、臙圧とはまた別の吸い付きがある。後背位のためか勢いがついて、肉棒は毎回、メイドの子宮に怒張をぶつけた。

「あんくううッ！ なつ、なんなの？ しゅ、すごい気持ちよく！」

呂律のまわらない翠が首の限界まで振り向き、ポニーテールを翻す。抵抗ばかりだった面持ちがだらしなくなり、唇の端から涎まで垂らす。

子宮へのキスが気持ちよくてたまらない、といった顔つきだ。瞳に悦びを秘め、灼けた吐息で頬を上気させる。

「とめつ、ろめてえ、ナル坊！ あはつ、あはし、どうにかなつへる、んふあはゆ、もおおかしくなつひやつてるからあ！」

しかし、淫らになりきれなくて切に拒む。

そんなメイドの柳腰に、もうひとりのメイドがさわさわと手を這わせた。  
「とても熱くなつてますよ、桐生さまも……んはあ、妬けちゃいます」

仰向けの紅亞が翠を抱き寄せ、微笑む。ふたりの豊満な巨乳がひしゃげ、翠は肉体の感度のよさにますます悶えるばかり。

「んふああ！ 紅亞さんも、あふつ、待つて？ お、お願いだから、放し……！」  
「だめですわ。ご主人さまがお楽しみになってらっしゃる、最中なんですから」

フリルをあしらった可憐なメイドたちの、ご主人様のためなら感じやすくなる肉体に興奮を禁じえない。スクール水着から際どく食み出す太腿も目が離せなかった。

牝二匹分の肉体がセットで弾み、ふくよかな乳果実をぶつけあう。お互いにすがりつくしなやかな脚は、少年が一本だけ引いて、まっすぐに引き攀らせる。

充分に蒸れたスクール水着に下半身でぶつかり、ご主人様も涎を垂れた。

「ボクもっ、いい！ 気持ちよすぎて、はっ、うはあ！」

敏感なペニスを焼かれる。粘液を絡めた肉襲の波に沈んでいく卑猥さだけでも、腰が抜けそうになるのに、直接的な刺激も凄まじい。頭は朦朧とする。

張り詰めた亀頭は、こそばゆいなどという次元ではないむず痒さに襲われていた。そこに摩擦の大量が押し寄せ、剥き身を舐めるように扱ってくれるのが、たまらない。

甘い痺れが股関節を駆け巡り、脊髄を打つ。

「これ出そう！ はあっ、ぜ、絶対に打ちやうよお！」

「だっだめ！ なかに出しちゃやだ、おあうく！」

そうは言われても止められない。刺激が途切れようものなら狂おしく、焦ってスクール水着に指を立ててしまうくらいだ。柔らかな太腿もリズムよく弾ませ、弄んだ。

闇雲に腰を繰っては、真っ赤に腫れた雁太を、メイドの濡れ穴で擦りまくる。翠の身体が押されて前のめりになり、仰向けの紅亞の上を巨乳で転がる。

「ばちゅんっ、ぢゅばん！ ばんっばんっばんっばんっ！」

抜き挿しごとに粘音が弾けた。発情汁は濁って異様に粘り気も強い。

「ああん！ やっ、ほんとにイク、あたし！ あはひ、な、ナル坊なんか……イカされちゃあ、おおふ、オチンチン、またっおくに！」

汗だくのメイドも悦がり狂って、興奮状態の男の子を悩殺する。

「ナル坊じゃなくて、ボクはご主人様でしょ! うはあつ、んくああ!」

ご主人様に熱烈に求められる肉穴は、それが至福であるかのようにひくつき、秘粘膜のぬるつきで剛直をしゃぶった。肉襞の波が雁太の付け根を流れ、悦痺をばらまく。

年下の少年は俄かに腰をぶるつかせ、段違いにペースを跳ね上げた。

「いっくよ! スイ姉、ボク! はあつ、もうイク!」

股間の底でみるみる高熱が膨らむ。同時に肉棒が、先端のみならず根元まで剥きおろされたみたいに敏感になる。感覚が溶け始めた怒張は、エラの返しで煮えた粘膜をぐちゃぐちゃにかき混ぜ、マ○コ襞と熱くもつれあつた。

「だから、だめ! ひはつナル……ご主人さま、許ひて! これいじょうされたら、ほんどらえ、らめなのお! あはああ!」

悩乱する翠のほうも、ひくひくと前兆めいた疼きでこちらを刺激してくる。拒絶の台詞とは裏腹に、発情期の牝穴は突き込みを催促してくる。拒絶の台詞

穴の中が肉と汁だらけのメイドは、相方のメイドに掴まり、お尻をわななかせた。

「紅亞さんっ! んああ、らっ、助けれええ!」

「あん、桐生さま? そんな声を出されては、わたくしまで」

その下では淑女が、初めてに違いないオナニーの真っ最中である。スクール水着の水抜きに片手をつまみ、糸練りのように五指を操っている。

「紅亞も一緒にイこう! ぼっ、ボクと、スイ姉と! 一緒に!」

「か、かしくまりました……さ、さつきみたいです、んあつ、気持ちよく！」

ご主人様の命令は絶対だ。壺口を指で穿り返すほど、恥じらう表情から締めりがなくなつていく。ついには舌まで垂らして。

「これいいです、しゅろく、ひはあ、えへえあ！」

「あはしまで、まつ、まきこまないれえ！」

同じみつともない顔つきで翠など、れろれろと舌なめずり。子宮を打たれるのが一番のお気に入りらしく、怒張が届くたび、艶な瞳を潤ませる。

ぬるつく肉壁に溺れる勃起が痺れついた。

「はあはあ！ はあはあつ、はあ！」

もうまともな言葉を発せられない。腰を前後させるだけなのに、マラソンみたいに呼吸が乱れ、酸素が足りなくなる。それでもゴールが近く、どんどん加速する。

これ以上は肉棒の長さを抜き挿してもいられず、亀頭一個分のピストンでひたすらPスポットを連打した。ごつん、ごつんと。

快楽神経に熱痺が漲り、痺れを膀胱より深いところに差し込む。

「ご主人さまあ！ もおらめ、あたひ、ひあつ、ああ……やあつこれ、なかに！ ごしゅじんさまのれてる、えれ、出ちやつてるうう！」

翠がはつと目を見開き、胎内の感覚を白状した。ご主人様が予告もなしにメイドの穴を使用し始めたのである。

どびゅびゅつ！ びゅくつ！ びゆるびゆるびゆる！ びくびく！



それ以上に翠が胴震えを起こし、背中を限界までのけぞらせた。

「ひはあつ？ あ……らめ！ あなつ、あなる！ あなるでイっひやう、あたし、あなるせつくすれ、いいっイク、イっちやいそお！」

紅亞のセーラー服に抱きつきながら叫び、肛門のひくつきを加速させる。剛直にとつてもくすぐつたくて、股間の底がじわじわと熱を帯び始める。

「イクって、スイ姉？ オマ○コじゃなくって、はあつ、あなるでイクの？」

「だからそおいつつへるじゃない！ ぬいて、オチンチンぬいれええ！」

狂乱する尻穴メイドのスクール水着を、少年の手は脇からおへそをなぞるように撫でくんだり、三角地帯へと忍び込んだ。手探りでパイプを弄り、振動の威力を最大に。

ついでに紅亞のパイプも振動を「強」に切り替えてやる。

翠と紅亞は首でもつれあい、肉体そのものをバイブレーションさせた。

「やあんっオマ○コ！ えあ、オマ○コもイっひやうから、あたひ、あたしもお！」

「ご主人さま？ あつやあ、とめてくらはい！ こんなにつわ、わたくし！ たえられません……あはつ、あばれへるんですう！」

紅亞は令嬢育ちが嘘であるかのような開脚のポーズを、引き攣らせ、スクール水着の水抜きから濁った蜜を溢れさせる。

翠のほうはアナルピストンのたびに発情汁の量も増え、閉じ合わさった太腿は白タイツを蒸らす。紅亞よりも悩乱が激しく、とつくにしゃくりあげていた。

「いいい、イク！ いいれしょ？ あはつあたし、もつ、もおイっちやても！」

「イク前に教えてよ！ スイ姉、バイブとボクの、どっちが、あううく！」

少年のほうはまだ耐えていられたが、少しでも気を緩めようものなら、一気に果てさせられそうだ。直接的な締め付けだけでなく、煮えた液体の流動感も卑猥で心地よい。

お姉さんぶっていたメイドの顔つきが、みるみる牝の悦びに屈していく。

「オシリの！ ご主人サマのがぶっとくれえかはくて！ あっあつふて！ いいのっ、あなるおかはれ、えひあ、へんたひなのに、しゅごくいいのおおお！」

オチンチンの感想をまくし上げながら、翠はアナルを強烈に緊縮させた。凄まじかった吸引がまたもベクトルを逆転させ、勢いよく肉太をひりだす。

ぶりゅぶりゅっ、ぶりゅ！ ぶりゅぶりゅ！

怒張が外れた後も、拡がり気味の肛門が異様にひくひくする。

「イっへる！ ごしゅじんサマ……あへえ、イってるのお、あ……あなる！ びくびくっ  
れ、イっひゃつれる、オマ○コになっへるの、あたしのあるううううう！」

ペニスなどを排泄した牝一匹は、表情が溶けそうなくらい恍惚の笑みを浮かべ、アクメに酔いしれていた。犬みたいに垂れた舌を、しどけない唇にのたくらせる。

涙ぐむ瞳は艶を秘め、ぞくりとするほど淫らな目つきだ。濡れそぼった尻穴は金魚みたいにぱくぱく開閉して、腫れた龟头を啄みたがってくる。

「す……スイ姉？ ボクはまだ」

ご主人様の勃起はなお健在であるにもかかわらず、満身創痍のメイドはかくんと姿勢を崩し、廊下で仰向けに転がった。スクール水着の水抜きからは電動バイブが飛び出し、機

械的な振動を続けている。

「あはあ、ご、ごめんはない、ご主人さま……あたし、立つてられなくて……」

肌もタイツも白い太腿が、百八十度まで開かれ、股間の有様を見せびらかす。そこは水というより油にまみれたように、ぬらぬらと鈍い光を放っていた。

翠は拡がりつ放しの尻穴が気になるらしい。自らお尻の外円を撫でまわし、肛門付近に指で差し掛かつては、直接には触れずにいる。

「だめ……も、漏れちゃいそお！ お願……トイレまで連れてって？」

「そうなの？ だったら、スイ姉のをこっちにすれば……」

そこでご主人様は彼女のバイブを抜き取り、それを後ろの穴へと嵌め込んだ。

ずりゆずりゆずりゆ！

栓にするには確実な太さであり、おまけに振動で刺激もしてやれる。仰向けのメイドはアナルストッパーで床とぶつかり、細腰だけ跳ね上がらせた。

「ああん！ はあふ、ご主人さまのいじわるう」

翠の声色が普段と違う。ご主人様に甘える口調で、肛門などにバイブを捻り込まれたのに、嬉しそうなのだ。忠実かつ貪欲なマゾ穴メイドの誕生である。

スクール水着のよれた水抜きでは、牝穴がずぶ濡れの花びらを咲かせていた。

「スイ姉は変態だね。あなる、まだ気持ちいい？」

「はひ、とつても……気持ちいいれす、オマ○コもどろどろで」

マゾメイドが細やかな指使いで肉唇をのけ、膣口をほぐす。呼吸のたびに、たおやかな

肩でセーラー服を上下させ、巨乳のラインも擦っている。

今の彼女なら、命令が何であれ従ってくれそうだ。

「よおし。スイ姉？ 紅亞を捕まえるんだ」

「かしこまりましたあ、ほら、紅亞さん」

少年が命じると、翠は驚くほど俊敏に手を伸ばした。逃げ腰だった紅亞のセーラー服を引つ張り寄せ、両腕でがつしりと腰をロックしてしまふ。

メイドたちの巨乳がセーラー服越しにむにゅと重なった。

「桐生さま!! どうなさって……ご主人さまも、あうつ、お戯れがすぎます!」

いつもは絶対従順を旨とする紅亞が珍しく反抗的だ。しかし翠に被さって四つん這いになり、ご主人様にお尻を差し出すしかない。

アナルピースを引き抜く際、令嬢が気張るような恥ずかしいカオをする。真空効果でも働いているのか、ピースは肛門一帯を捲りながらも、しぶとい。

玩具が外れると同時に出口が窄まり、光も空気も拒む。

「んうう……んふあっ! はあ、お、お待ちください、ソレだけは」

「ソレって何のこと? もしかして……コレのことかなあ?」

わかっていながら、少年はぬめ光る勃起の興奮ぶりを見せ付けた。翠の中では果てられなかったせいで精を吐きたく、疼いてならない。刺激を中断された亀頭が猛烈にむず痒くて、一秒でも早く穴に飛び込まないことには、おかしくなりそうだ。

もどかしさは焦りにもなつて、息荒く煩悶としてしまふ。

(はやく、はやく入れないと！)

男の子が構えずとも、肉棒はメイドの小穴をまつすぐに狙っていた。根からのたうつては鈴口を割り、カウパーを先走らせる。

「お願いですから、ひぐつ、どうか、お許しを……」

可憐なメイドの、羞恥の涙にもそそられてしまう。調教じみたアナルセックスでご主人様は最高に昂っており、これまでになく嗜好は嗜虐的なものに傾いていた。

是が非でも彼女もアナルで喘がせてみたくなり、まずはスクール水着の食い込みを怒張で執拗になぞる。紅亞ではなく穴を焦らす。

「許してあげないよ。スイ姉、はあ、ちゃあんと捕まえててね」

「紅亞さんも抵抗しないで、あふう、気持ちいいんだから」

翠は紅亞のセーラー服に手をつ込み、豊乳を揉みしだいた。オマ○コに嵌まりつ放しの電動バイブも数えれば三人掛かりだ。

「気持ちよく、なんて……んふあ、なつ、なりませんから……あえいあ！」

抵抗の弱くなつていく紅亞の吐息が色香を含む。スクール水着が半分剥けたお尻は異常に熱っぽく、汗の感触が粘っこい。

「これからなつちゃうんだよ、紅亞も、うつくうう！」

少年は息を呑み、汗だくのお尻に指を立てた。清らかな少女の、日常的であつても秘匿すべきプライベートを、野暮なオチンチンでこじ開けてしまう。

肛門の抵抗力に一度は押し戻されたものの、先ほどは翠で開通できたのだから、くぐり

抜けられる確信がある。

亀頭の半ばまで強引に押し込むと、菊皺がめり込んだ。

「むりです、はおつ、はいりません……ひあ？ あい、いいいッ！」

最大まで拡張された尻穴が窄まろうとして、雁首の括れに滑り込む。こうなれば、あとは進まずとも、欲張りなアナルがオチンチンをひとりでに呑み込んでくれた。

「ずぶずぶっ！ ぬちゅ、ぐちゅぬちゅぬちゅ！」

付け根まで一気に、少年の下腹部にお尻でぶつかる勢いで、だ。

「はっはいっれ、はいってますう、ごひゅじんさま！ ぬっ抜いれ、おおつ、オチンチン抜いてくらはあい！ オシリ、オシリが壊れへします！」

「大丈夫よ紅亞さん、リラックスして……んふ、オチンチンの形、わかるでしょ？」

紅亞の暴れる腰を、下から翠がしっかりと抱き締め、囁く。翠の肛門ではパイプが振動し続け、頻繁に腰を打たせている。

アナルの快楽を受け入れられない恥ずかしがり屋のメイドは、頭に熱を浮かせるように赤面しつつ、ストレートヘアを翻した。肩越しに振り向くさまも優美だが、肛門などにオチンチンで栓をさかしては、品性も台無し。

「ほんとに、あくつ、らめなんです……ご主人さまにオシリの穴を、みう、見られただけでも、恥ずかしくって、死んらいそうなのに……このような、お戯れまで！」

従順なメイドにもさすがに許容できないプレイはあった。しかし紅亞の嫌がる表情が新鮮で、もっと見ていたくなる。無理やり喘がせてみたくなる。

ご主人様は粘着質な手つきで、お尻のスクール水着と柔肌を撫で比べながら、アナルの締め付けをじつくりと味わった。

「紅亞のあるも、すごくいいよ？ ぬっ、ぬるぬるってしてて！」

苛烈な圧力は根元に集中しており、湿ったベルトで締め上げられるみたいだ。狭い門をくぐった先は液体の感触ばかり強く、粘膜はぐつぐつと煮え滾っている。

（オマ○コとは違う気持ちよさっていいのかな？）

翠とのアナルセックスも思い出しながら、雁首に染みてくる液の熱さに身震いする。結腸はペニスを形通りに包み込んで、今にも蠢きそうな気配だった。

本当は排泄器官ではなく性感帯なのかもしれない。

「あふうん？ ご、ご主人さま、んっはあ、お願いれす、わたくし……」

吐息を色めかせる紅亞が、四つん這いの姿勢ではいられなくなり、翠のふくよかな豊乳に突っ伏す。ふたりともセーラー服のせいか、生徒会の活動の一環にも思える。

ご主人様はにやついて、苦悶するメイドに選択肢を与えた。

「恥ずかしくてガマンできないの？ それとも、はあ、気持ちよくなりたくてガマンできないの？ ……恥ずかしいなら、やめたげてもいいけど」

「はっ恥ずかしいです！ ですからすぐ、やめ……うあはああ？」

返事は即答だったが、言葉の途中で舌がもつれる。下で寝転ぶ翠が、紅亞の電動パイプを手に取り、ぐりぐりと角度を変え始めたのだ。

「気持ちよくなっちゃってるじゃない、あはっ、紅亞さんてば」

「そ、それは、おお……オマ○コ、ですから、あの」

卑語も精一杯の淑女を、男の子も徹底的に責め立ててやる。

「紅亞つて、パイプでオマ○コぐりぐりされて、感じちゃうんだ？ 変態だね」

「いつ言わないで、一成さあん！ ほんとに、はっ、恥ずかしいんれす！」

変態、の一言はかなり効いたらしい。可哀相なくらいの羞恥で涙ぐむ。メイド姿の紅亞に「一成さん」と呼ばれたのも初めてだ。

しかし同情はできなかった。変態メイドは現に電動パイプで感じ、カエルみたいに脚を広げ、肉唇から濁った涎を垂らしまくっているのである。

それをしかも、翠の、仰向けの肉穴へと注ぎ込む。

「んもう、あたしのまで、ン、ぐちゃぐちゃあ、熱ういんだからあ」

翠は片腕で紅亞のウエストを抱き寄せながら、汁気の多い自慰に耽った。淫らなムードが濃厚に立ち込め、快楽を貪っていないければ、むしろ異常になってくる。

興奮の行き過ぎた少年は、メイドのお尻をばしんと叩いた。

「ほら、紅亞も！ スイ姉と競争だぞ？ どっちが先に、うあつ、ああああ？」

その拍子に結腸が蠕動し始める。ピストンには狭すぎても、穴そのものが圧力を前後にうねらせてくれるおかげで、スムーズだ。

「ひぎいいいいッ！ あう、うっうごかはないでくらはい、ごひゅじんさま！ オシリのなかれ、こふ、こすれへ！ かたいのこすれますの！」

嫌がるにしては甘い声でメイドがいなき、急な発作を起こす。

尻穴は雁首が出かかったところで括約筋を締め、肉棒を留めた。続けざまに抜群の吸引力を發揮し、男の子の下半身を連れ戻す。

ぐぼっぐぼ！ ずぼっ！ ずぼ、ぐぼぐぼおっ！

トイレでしか聞くことのない、汚らしい音の連発だ。極太を無限にひりだす快感に、紅亞の肉体は素直に感じ始め、パイプとペニスの両方をぬめ光らせる。

「うあんっ！ あん、おっ、オシリが！ オシリがめくれまふの、めくれれっ、出ちゃいます！ ごしゅじんはま、れちやいますう！」

本心では嫌がつているのかもしれない。だが、腫はどことなく陶然としており、顔つきは笑み崩れそうになっていた。舌を出すさまも犬みたいで、はしたない。

吸い付きの強い肛門が、窄まりでサオの全長をきつめに抜く。

「感じてるんだよね？ 紅亞！ うあっ、んはあ！」

たまらず少年も恥声を張り上げ、悶絶した。どう辱めようか、と悠長に考えていられたのが不思議なくらいだ。紅亞の熱い体液が剛直にからみつき、染み込んでくる。

腫れぼったい亀頭は、粘っこい中を泳ぐうちに痺れついてしまった。快感が股間の底を撫で、背筋を震え上がらせる。

「あたしもばいぶ！ ば、ばいぶれ、あなるしゆるんだからあ！」

翠は舌足らずになるまで色悶え、空腰を打っては、肛門のパイプを床と激突させた。前の穴で自慰どころでもないらしく、両手で紅亞のセーラー服を引っ掴む。

「引っ張らないで！ 桐生さま、ひはああ！ ご主人さまのが、おおっ、おくに！」

上に被さる紅亞もパートナーのセーラー服を握り締め、アナル開発に喘いだ。

ふたりともスクール水着に牝の汗とにおいを蓄え、股底に発情汁を溜めている。互いのボディラインを巨乳でなぞるようにもつれる光景が疊惑的で、狂おしい。

メイドの乱れぶりに悩殺され、ご主人様も喘ぎを速めた。

「ボクも気持ちいいよ、すっ、すごいいい！ あなる、クセになっちゃう！」

前後する締め付けにサオを抜き抜かれ、肉棒はますます硬くなる。支柱は皮膚に厚みがある分、少々激しくても痛みはない。

同時に、剥けた亀頭ではアナルのぬめりを生で感じる事ができた。奥に届くほど多くの汁が感触できるものだから、つい突き込んで、快楽電流に痺れてしまう。

「らめです！ ごひゅじんさま、わ……わはくし！ オシリれつ、オシリで粗相するかもしれません、どおか、あんっおゆるしを！」

深紅のストリートヘアを波打たせ、紅亞が天井を振り仰いだ。ふたり分の巨乳を下敷きにして肉体を弾ませながら、窓ガラスに大変な力音を晒す。

今にも白目を剥きそうで、舌を引つ込めることのできない、みつともないアへ顔だ。ご主人様の杭打ちごとに、色っぽい喘ぎを吐き出し、頭をふらつかせる。

「あたしもらめええ！ もおイク、あなるっ、またあなるでイっちゃうう！」

翠も同じ顔つきでアへアへと悦がっていた。互いのセーラー服を掴んで、秘密の生徒会は肛門で風紀を乱す。フリルをあしらったメイドの装いも、おそらく学則違反。

ご主人様は踵を浮かせ、繰り返し紅亞の尻穴に飛び込んだ。

「ボクも……もうっ！　だ、だけど、教えて！」

膀胱とは似て異なるところに高熱が滞留し、強迫的な排出意欲を催す。それほどの極限状態にあつても、聞き忘れていたことを彼女に問い詰める。

「ど、どっち？　どっちがぶつといの？　あうっ、く、紅亞あ！」

「オチンチンれす！　ご主人さまのほうが、ずつと、ぶ、ぶつとく！」

今度も即答だ。しかし令嬢は大変な誤解をしたようだ。

「いつも出ひてるのより、ごしゅひんさまの、っあお、オチンチンのほうが、ぶつといとぞんじ、ぞんじあげれおり、しだいれ、あへえ！」

パイプではなくウンなどと比較し、べらべらと白状してしまう。

「下品なこと言っちゃって！　お仕置きだ、んはあつ、お仕置きだぞ！」

ご主人様は勢い新たに、教育的指導をマゾ穴にぶち込んだ。あれだけ嫌がついていた紅亞もアナルの快楽に屈し、腰から太腿を打ち震わせる。

「ああん！　おつ、おねがいます！　わたくしに、ひはう、仕置きください！」

「紅亞さんばかりずるうい！　あたしにももつとひて、ごしゅじんサマあ！」

翠も肛門でパイプを振りまわし、浅ましく快楽をねだる。

少年の爪先が下のパイプを蹴り上げると、翠がしゃくりあげた。カニみたいに両脚でも紅亞の腰に掴まり、肉体を器用に弾ませる。

「あつはああ！　いきゆの、イクう！　ご主人サマとイクイクするの！」

「わたくしですつ、んふあ！　わたくしが一緒に、えはっあく！」

紅亞も対抗して声のトーンをあげ、狂おしそうに悶え狂う。アナルは拡張よりも収縮が速く、多くなり、煮えた汁でオチンチンをししゃぶり抜いた。

ぐぼっぐぼっぐぼっ！ ぐぼぐぼぐぼぐぼ！

股間が性急な焦燥感に駆られ、ピストンを急ぐ。菊皺を盛り上がらせては、剛直を硬く埋め込んで、付け根まで結腸粘膜を行き届かせる。

「はあはあ、はあ！ でて出る！ 出すよ、ああつ、あ、あなるにれちやう！」

激しい運動量に憔悴寸前の身体が真っ赤に過熱した。頭の中も沸騰させ、メイドたちと快絶のラストスパートを駆け抜ける。

「ご主人さまあ！ くださいっ、オチンチン、ひはっあ、あなるに！ わたくしのあなるで、えお、おだひになつれえ！」

巨乳を持ち上げる力もなく、上半身は翠に這い蹲っている紅亞と。

「あなるすごい、イク！ あたしイっへる、これ、もおイっへるかも！」

紅亞に両手両脚でぶらさがるポーズの翠と、一緒に。

焼けそうな肉棒がアナルの圧力をくぐり、猛々しく吼えた。

びゅびゅっ！ どびゅっ！ びゆるびゆる！ びゅくびゅくびゅく！

「出てるよ！ せっ、せえし！ せえし、ひは、せえきでるっ！」

失禁めいた漏出感とともに、全身の淫熱が肉砲から飛び出していく。細長い尿道で快感が連鎖し、硬かったオチンチンを甘く蕩かしてしまう。

男の子が爆ぜるのを待ち侘びていたかのように、ふたりのメイドが絶叫した。





肉棒はずりりと外れ、黄ばんだ汁を滴らせた。二回に及ぶアナルファックに疲れ果てたのか、萎えるほどではないが俯いてしまう。

メイドたちは唇を全開にして、息継ぎに精一杯だった。上気した顔に淫欲を深め、唇の涎を舌なめずりで回収する。

「はふう、あう……すごすぎ、あたし、オシリがまだびくびくしてる」

「わたくしもです、閉じなくって、もお、漏れちゃいそうで……」

優しいご主人様はふらつきながらも、紅亜のバイブを抜き取り、それを緩みがちな肛門へと嵌めなおした。大変なモノが漏れないように、深めに栓をしておく。ついでにふたりのスクール水着を、お尻の全体に薄く伸ばしなおしてもやった。

股布の後方は電動バイブで盛り上がっている。

ところで廊下は彼女たちのオシッコで水浸しだ。風通しがよい場所のおかげで、さほどでないものの、独特の異臭が漂っている。

調教の味を知った少年は、ふたりのメイドに清掃を命じた。

「スイ姉、紅亜。ちゃんと拭いておくんだよ。……ただし、雑巾は使わずに」

翠も紅亜もだらしない顔つきのままであり、意識があるかどうかも怪しい。暗示に掛かったように頷き、上半身だけ起き上がって具体的な指示を待つ。

「そのスクール水着でゴシゴシって磨くんぞ、わかった？」

自分でも信じられない発想だった。けれども、ここまで墮ちたメイドがどこまで隷属的に尽くしてくれるのか、確かめたい。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

# ハーレムシリーズ

## 公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、  
「歴史年表」「人物相関図」  
等々あの超人気シリーズの  
世界観を網羅した  
**完全ガイドが登場!!**

特別描き下ろし  
イラストも多数収録!



*Now On Sale!!*

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

# あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価 / 690円(税込)



全国書店で  
好評  
発売中

凄腕退魔士の咲妃を  
牝奴隷に堕とす  
新たな敵の登場!

呪詛喰らい師2  
[小説・蒼井村正 / 挿絵・或正せねか]



全国書店で  
好評  
発売中

少女天使の暴走が  
平和な学園生活を破壊する!!  
シリーズ急展開のバトル&エッチ!!

思春期なアダム4  
[小説・さかさ傘 / 挿絵・天海雪乃]



「小説・大熊狸喜 / 挿絵・大空樹」  
オトミッコ!  
僕は男の巫女娘

全国書店で  
好評  
発売中

男の子と女の子——  
二つの性の間で揺れ動く  
男の娘が巻き起こす学園ラブコメディ!!



既刊LINEUP ● 仙狐字態戦姫ノブナガリ ①～③  
● ビルグリムメイトン ①～③  
● 不死の吸血鬼がTSのご主人様を募集しているよです

● 思春期なアダム ①～④  
● 呪詛喰らい師【カースイーター】  
● 女幹部メル様のカセイ征服計画!  
● 借金お嬢小姐 ①～④  
● 無敵の姫騎士がDMMに目覚めたようです  
● 宇宙海賊学園ブラックキャット

# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!  
来かねる場合がございます。い場合、お手数ですが再度お問い合わせください。
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!

**VALKYRIE**



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

**cranberry**



<http://www.cran-berry.com/>

**mille-feuille**  
ミルフィーユ



<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元  
ドリーム**



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!